

早稲田大学フィルハーモニー管絃楽団
Waseda University Philharmonic Orchestra

第 83 回定期演奏会
The 83rd regular concert

2020.12.24



program

ドビュッシー 小組曲 (ビュッセル編)
Claude Achille Debussy Petite Suite (orch. Brüßler)

- I. 小舟にて En Bateau
- II. 行列 Cortège
- III. メヌエット Menuet
- IV. バレエ Ballet

【約 12 分】

スメタナ 連作交響詩《我が祖国》より〈モルダウ〉
Bedřich Smetana "Má vlast" Symphonic Poem No. 2 of "Má vlast"

【約 12 分】

休憩 20 分

チャイコフスキー 交響曲第 6 番 口短調《悲愴》
Piotr Ilyich Tchaikovsky Symphony No. 6 in B minor "Pathétique"

- 第 1 楽章 Adagio - Allegro non troppo
- 第 2 楽章 Allegro con grazia
- 第 3 楽章 Allegro molto vivace
- 第 4 楽章 Finale. Adagio lamentoso

【約 55 分】



ご挨拶

会長 水島 朝穂 (法学学術院教授・法学博士) <http://www.asaho.com/>

本日はお忙しい中、早稲田大学フィルハーモニー管絃楽団第 83 回定期演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。昨年、創設 40 周年を祝ったのも東の間、2020 年は大変な試練に見舞われました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、パート練習をはじめ、オーケストラの命ともいべき演奏会ができなくなってしまいました。6 月の定期演奏会も中止されました。それでも、団員たちは、Zoom を使ったオンライン練習を行い、また新入団員もオンラインで増やしてきました。何事も諦めない学生たちに、心から拍手を送りたいと思います。

大学から「課外活動の段階的な再開について (第 3 報)」(10 月 5 日)が出され、従来までの活動制限が緩和されました。「感染予防の徹底等、大学が提示するルールを遵守」することを条件として、サークル主催の公演会の開催もできるようになりました。パートごとの練習も、大学に細かな申請書を出すことが求められるなど、不自由な中で練習を続け今日という日を迎えることができたことを喜びたいと思います。ただ、聴衆を限定した中で、オンライン演奏会という形をとらざるを得なかったことをご理解ください。

早稲フィルは学生オケとして、毎年のようにメンバーが出入りします。また、大学公認サークルですが、インターカレッジ的性格をもち、他大学の学生も少なからず参加しています。そんな早稲フィルですが、校歌にある「仰ぐは同じき理想の光」のもと、団員一同、心を一つにして演奏する姿をお楽しみください。

本日のメインは、チャイコフスキーの交響曲第 6 番 口短調《悲愴》です。直近では 2016 年 12 月の第 75 回定期演奏会で演奏しました。コロナ禍で練習してきた団員たちの心の叫びをお聴きください。

インスペクター 芦原 里紗 (Vc.3 年)

本日はお忙しい中、早稲田大学フィルハーモニー管絃楽団第 83 回定期演奏会にお越しいただき誠にありがとうございます。団員一同、心より御礼申し上げます。

早いもので 2020 年が終わろうとしています。今年は世界中がコロナ禍に見舞われ、東京オリンピックをはじめとする多くのイベントが延期または中止となりました。当団にとっての大イベント、第 82 回定期演奏会も中止となってしまいました。

第 83 回定期演奏会こそは限られた時間や環境の中で、少しでも良い形での開催に漕ぎつけよう……そういった想いで団員一同準備を進めてまいりました。無事に演奏会を開催できたのは、団員はもちろんのこと、指揮者の松岡先生、トレーナーの先生方、水島会長、OBOG や賛助の皆さま、そして演奏を聴いてくださる皆さまのおかげです。

早稲フィルにとって 2020 年最初で最後の演奏会、1 年分の想いを込めて演奏いたします。ぜひ最後までお楽しみください。

指揮者 松岡 究

Conductor Hakaru Matsuoka



成城大学文芸学部卒業。音楽学を戸口幸策氏に、指揮を小林研一郎氏、ヨルマ・バヌラ氏、ランベルト・ガルデッリ氏に師事。

1987年東京オペラ・プロデュース定期公演、ドニゼッティ《ビバ！ラ・マンマ》を指揮してデビュー。その後ブッチェーニ《蝶々夫人》、ロッシェーニ《オテロ》、フンパーディンク《ヘンゼルとグレーテル》、ビゼー《カルメン》、ロッシェーニ《婚約指輪》、ヴェルディ《椿姫》、モーツァルト《フィガロの結婚》《ドン・ジョヴァンニ》《魔笛》、トマ《ハムレット》(原語初演)、R.シュトラウス《カプリッチオ》等を指揮。

1991年文化庁在外派遣研修生として、ハンガリー国立歌劇場及び国立交響楽団に留学。

1992年スウェーデン・アルコンスト音楽祭にヨルマ・バヌラ氏より招待され、タリン国立歌劇場管を指揮し、「卓越した才能」と高く評価された。

帰国後は、1993年から1996年まで新神戸オリエンタル劇場管弦楽団常任指揮者として、オペラとコンサートをプログラミング・指揮。また東京オペラ・プロデュース指揮者(1987年～2008年、現在はスタッフメンバー)として、数々のオペラ・グノー《ロメオとジュリエット》、ワーグナー《恋愛禁制》、ベルリオーズ《ベアトリスのベネディクト》、R.シュトラウス《無口な女》、ヴェルディ《王国の一日》《二人のフォスカリ》、ドニゼッティ《当惑した家庭教師》、ビゼー《美しいバースの娘》を指揮した。また日本ロッシェーニ協会における《ランスへの旅》の日本人による初演を指揮し、いずれも好評を博し再演・再々演の指揮も担当。これらはいずれも各界から大きな反響と高い評価を獲得し、「きわめてバランス感覚に富んだ才能」、「熟達の指揮ぶり、自らが意図する表現に歌手を自然に導く」、「オケから耽美的な響きを引き出し、抜群」等、新聞各紙、音楽雑誌などで絶賛された。

2002年鳥取国立文化祭にて新倉健《ポラーノの広場》の初演を指揮。2001年4月、2002年9月、2003年5月に新国立劇場小劇場オペラシリーズに連続で登場し、ブリテン《ねじの回転》を2年連続で、続いてガツァーニーガ《ドン・ジョヴァンニ》を指揮し高い評価を受けた。2004年11月より2007年10月までローム・ミュージック・ファンデーションの在外研修生としてベルリンにて研修。帰国後日本オペレッタ協会音楽監督(2012年まで)、東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団専任指揮者、2012年秋からは常任指揮者に就任した。



早稲田大学フィルハーモニー管絃楽団

1979年12月創立。早稲田大学の学生を中心に、様々な大学の学生が集まる早稲田大学唯一のインターカレッジ・オーケストラである。年2回の定期演奏会を軸に、室内楽演奏会、新宿区での小学校における音楽教室、「早稲田祭」への出演など、多様な音楽活動を行っている。室内楽を原点としたオーケストラ・アンサンブルと「自分たちの音楽」をモットーとし、約100名の団員が日々音作りに励んでいる。1980年3月の第1回定期演奏会から今日に至るまで、福富俊一、森山崇、小田野宏之、飯守泰次郎、松岡究、小林研一郎などの多数の指揮者を招聘し好評を博している。昨年度には40周年を迎えた。



楽曲解説

ドビュッシー 小組曲(ビュッセル編)

Debussy Petite Suite (orch. Büsser)

小組曲は1888年から1889年にかけてクロード・ドビュッシー(1862～1918)によって作曲された4手ピアノ用の組曲である。

4つの小曲からなり、全てにタイトルが付けられている。中でも第1、第2曲は、当時の詩人ポール・ヴェルレーヌの詩集『艶なる宴』にもある詩と同じタイトルが見られ、ドビュッシーはヴェルレーヌの影響を受けたと言われている。

全ての楽章が三部形式で構成されており、ドビュッシーの作品の中でも初期の作品にあたり、伝統的な作曲技法で書かれている。

後に、彼の友人であった指揮者のアンリ・ビュッセルによって管弦楽用に編曲された。本公演ではビュッセル編曲の《小組曲》を演奏する。

I. 小舟にて En Bateau

ハープが奏でる分散和音に乗って、フルート・ソロの主題から始まる。6/8拍子で奏でられる優しい旋律が心地良く揺れ、動きのある中間部へと続く。中間部では弦楽器やホルンを中心に躍動的なフレーズが奏でられ、再び最初の主題に戻っていき、静かに閉じる。

II. 行列 cortège

木管楽器による優雅な主題から始まる。後にチェロとファゴットの躍動感溢れる動きからオーケストラ全体が盛り上がり、装飾と強弱のコントラストが特徴的な中間部へと突入していく。やや断片的な形で最初の主題へと戻り、決然と終わる。

III. メヌエット Menuet

ゆっくりとした木管楽器の前奏は、詩人テオドール・ド・バンヴィルの詩を用いて作曲された歌曲《艶めく宴》の旋律がそのまま取り込まれている。ブルボン朝を思わせるような古風なメヌエットの旋律がヴァイオリンによって奏でられ、この楽章のみに用いられているコーラングレを中心とした木管楽器のソロへと音楽が紡がれていく。

IV. バレエ Ballet

ルイ14世がバレエを踊った様子をイメージして作られた2拍子の軽快なリズムが弦楽器によって奏でられ、ゆっくりとしたワルツに移っていく。最後はテンポが上がり、壮大なフルオーケストラによって色彩豊かに締め括られる。教会旋法や全音階が用いられ、ドビュッシー独自の作風が窺える。

(松下 琴和)

スメタナ 連作交響詩《我が祖国》より〈モルダウ〉

Bedřich Smetana "Vltava" Symphonic Poem No.2 of "Má Vlast"

ベドルジフ・スメタナ（1824～1884）によって作曲された《我が祖国》は、「ヴィシェフラド（Vyšehrad）」「ヴルタヴァ（Vltava）」「シャルカ（Šárka）」「ボヘミアの森と草原から（Z českých luhů a hájů）」「ターボル（Tábor）」「ブラニーク（Blaník）」の6つの交響詩がまとめられた連作交響詩であり、それぞれチェコの伝説や自然にちなんだ作品となっている。本公演では《Vltava》のみを演奏する。

チェコを貫く大河・ヴルタヴァをテーマにしたこの作品は、単なる自然への賛美にとどまらず、ヴルタヴァと共に生きるチェコ人の姿をも描き出している。シンプルなタイトルの裏に、民族の歩みを想起せずにはいられないだろう。

スメタナの生きた時代は、チェコ独立への機運が高まった時代でもあった。ハプスブルク家の支配のなかで、チェコ人はドイツ化する祖国に疑問を投げかけ、かつての「黄金の町」プラハを取り戻そうとしたのである。思えば、スメタナの生きたチェコは、チェコ人の住む土地でありながらチェコ語が禁じられ、外国語であるはずのドイツ語が飛び交う国であった（この曲のタイトルでさえドイツ語の《Moldau》とチェコ語の《Vltava》で表記が揺れているのだ）。

そんな時代に彼が投じたこの作品は、チェコ人の叫びとなって世界に響き渡った。憂いをたたえた旋律が森を走り、水勢を増しながらチェコの大地を駆けてゆく。言葉のない音楽の世界で、ヴルタヴァが見つめたチェコ人の栄光と苦悩の歴史が雄弁に語られる瞬間である。

そして、曲の最後を飾る Vyšehrad-Motiv（ヴィシェフラドのモチーフ）では、金管楽器によるファンファーレが祖国の明るい未来を祝福する。

一滴の水が小川となり、大河となり、田畑を、街を潤し、激しく水しぶきをあげながらドイツへと去ってゆく。早稲フィルの水面^{みなも}には、どんなドラマが映るだろうか？

（黒川 智史）

チャイコフスキー 交響曲第6番 口短調《悲愴》

Pyotr Ilyich Tchaikovsky Symphony No.6 in B minor "Pathétique"

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーの後期交響曲（第4番～第6番）には、共通して「宿命」というテーマがあると考えられている。その中でも、交響曲第6番はこの曲を取り巻く様々な事象によって、謎の多い作品となった。

交響曲第6番《悲愴》は、1893年2～3月にかけて着手され、同年8月に完成。10月16日、ペテルブルクにてチャイコフスキー自身の指揮で初演された。初演にはリムスキーコルサコフやラフマニノフ、若きストラヴィンスキーなどが訪れた。しかし、チャイコフスキーはその5日後の10月21日にコレラを発症。10月25日に急逝した。この死については不可解な点が多く、自身の同性愛の発覚を恐れての自殺であるとする説も根強い。いずれにしても、この交響曲と「死」にはかなり深い関係があると言える。

初演の翌日、楽譜の出版に向けて題名をつけようとした際、チャイコフスキーは弟から「トラギーチェスカヤ（悲劇的）」という名を提案されたが却下した。その後、同じく弟から提案された「パテティーチェスカヤ（パテティーク）」を採用することとなった。この副題は後に日本で「悲愴」として定着するが、ロシア語の「パテティーチェスカヤ」は厳密には「情熱的な、感情のこもった」といった意味であり、「悲愴」ではなく「情熱」と訳すべきだったのではないかとする意見もある。

チャイコフスキーが交響曲第6番について記した手紙の中にこのような一節がある。「この交響曲には標題性

はあるが、それは誰にとっても謎であるべきだ。想像できる人に想像させよう。ここにおける標題性とは全く主観的なのだ」。作曲から120年以上が経った現在でも、この曲の探究が終わることはない。

第1楽章 Adagio - Allegro non troppo 口短調、4/4 拍子

コントラバスの虚ろな響きの上でファゴットが呻くような旋律を奏でる序奏で始まる。その旋律を引継ぎ、第1主題がヴィオラとチェロに現れ主部へと続く。リズムが持つ切迫感に激しさを加えながら展開した後、テンポが緩まり甘美な第2主題が弦楽器によって奏でられる。クラリネットのソロに続く展開部は最強奏で叩きつける冒頭に始まり、嵐のように感情が爆発する。再現部では再びテンポが緩まりフルートとヴァイオリンを中心に第2主題が反復され、低弦のピッツィカートに乗って静かに楽章が終結する。

第2楽章 Allegro con grazia ニ長調、5/4 拍子

5拍子(2拍子+3拍子)のワルツ。優美なメロディにはどこか暗い影が漂う。中間部では口短調に転調し、ティンパニとコントラバスの刻みがさらに不安を煽る。主部に戻った後、木管楽器によるコラル風^{コラル}の下降音階が奏でられる。

第3楽章 Allegro molto vivace ト長調、4/4 (12/8) 拍子

イタリアの民族舞曲タランテラのリズムによるスケルツォと行進曲を融合した熱狂的な楽章。弦楽器と木管楽器のタランテラの旋律に始まり、徐々に行進曲へと移行する。初め、軽やかに進行する行進曲は、激しく勇ましいオーケストレーションに変化し、破滅的な雰囲気すら感じられるようになる。最後は低音の強烈な3連符で終止する。チャイコフスキー自身の音楽の発展史を描いているとも言われるこの楽章が、ベートーヴェンの「運命の動機」を思わせるリズムで叩きつけられるように終わるところにこの交響曲が示す意味を読み解く手がかりが隠れているように感じられる。

第4楽章 Finale. Adagio lamentoso 口短調、3/4 拍子

交響曲としては異例の緩やかな終楽章である。弦楽器の悲痛な旋律に始まり、木管楽器がため息を漏らすように応える。ファゴットによる慟哭にも聞こえる下降音階を経て、ニ長調の中間部へと移る。長調の美しい旋律が、あまりにも悲しく響く。この旋律と冒頭の旋律が対比されながら高揚し、悲嘆の極みを迎え、終わりを告げるようにタムタム（銅鑼）が鳴る。トロンボーン^{トロンボーン}の重々しいコラルの後、低弦の和音とコントラバスのピッツィカートによって臨終を迎えるかのように幕を閉じる。

（広瀬 悠人）

今後の公演予定

第84回定期演奏会

2021年5月23日（日）夜公演

指揮：松岡 究

杉並公会堂 大ホール

ドヴォルザーク 交響曲第9番《新世界より》ほか

※詳細は公式ホームページ (<https://wasephil.com/>) または各 SNS でお知らせいたします。

Twitter:@wasephil Instagram:@wasephilgram Facebook:@WPOsince1979

本日の演奏会のアンケートはこちら♪

https://docs.google.com/forms/d/17EUMyiMef_50CeZtAh51GrbnYeqma-MFqJlyrzYBNEc/viewform?edit_requested=true

今後の演奏会の参考にさせていただきます。
ご協力お願いいたします。